# リレー随想

## 長崎源之助氏のスピーチ

土地家屋調査士
田口　一法さん

長崎源之助氏、横浜市在住の児童文学者。正直私もそれまで知らなかったが、家内が言うには「大物」なのだそうだ。小学校三年生の国語教科書に「つりばしわたれ」という作品が掲載されている。家内がこども文庫を始めようとして、たまたまそうした活動をしている横浜にある氏の「豆の木文庫」の記事が新聞に紹介されていて手紙を出したところ「とにかく始めてみることです」とお返事をいただき、今も何かと気に掛けてくださっているとのことだ。

家内との関係で私たちの結婚式では、お二人の「大物」にあいさつをお願いした。お一人はその長崎氏、もう一人はトルストイ研究家の北御門二郎氏だ。年齢からいけば北御門氏を先にお願いしなければならないのだろうが、わざわざ横浜から来てくださるのだからと長崎氏に最初のスピーチをお願いした。仲人を「竹とんぼ」という（当時は水前寺に店があり、今は西原村に移っている）子どもの本を専門に扱うご夫婦にお願いしたが、奥さんは北御門氏の二女に当たるという事情もあって「北御門先生は身内と同じ扱い」とさせていただくことにした。

長崎氏は「しろいうさぎとくろいうさぎ」（ガースウィリアムズぶん・え／まつおかきょうこ・やく　福音館書店）という本の朗読をしてくださった。内容は仲の良いしろいうさぎとくろいうさぎが結婚するというもので、結婚というものの意味が優しい言葉で語られていた。

子どもに読み聞かせるような氏の朗読に、いち早く反応したのは文庫の子どもたちだった。彼らは（あるいは彼女らは）目をランランと輝かせ、氏の朗読に聞き入っていた。壇上から一番よく見える二つか三つのテーブルに陣取った小さな子どもたちが、一斉に目を輝かせている様は結婚式としては少し異様といっていい。氏が一番読み聞かせをしたい相手というのは、この場合私なのだろうが、それが小さな子どもと同列に扱われている。子どもたちが氏の朗読に聞き入れば聞き入るほど、何とも奇妙な印象を持ってしまった。読み終わって氏は「これからこの本を、みなさんのテーブルに回しますから、二人のために寄せ書きしてください」と近くの人に本を渡し「田口君、邦子さん、おめでとう。いつまでも仲良くしていってください」と一言おっしゃってから、壇上を離れられた。

長崎氏のあとで北御門氏にもあいさつをお願いしていたが、家内は「長崎先生のこんなスピーチのあとではやりづらいだろうな。北御門先生は大丈夫かな」と、身内と同じ扱いをしている人だけに心配したそうだが、北御門氏のスピーチは飄々（ひょうひょう）としていて、ちょっと他の人にはまねのできない、味わいのものだった。このスピーチも後日報告させていただくことにし、今回はこれまで。

（熊本市花園町、46歳）